

第一部

一 故事成語

画竜点睛 歴代名画記

病人膏肓 春秋左氏伝

杞憂 列子

塞翁馬 淮南子

呉越同舟 孫子

学びを広げる 故事をたずねる

単元設定のねらい

「古典探究」漢文編の導入として、訓読に慣れ、話の展開や文章全体を的確に捉えることを目的として、「故事成語」の単元を設けた。各教材は、短い文章ながら句法・語法などが凝縮されており、漢文特有の世界の捉え方・考え方も含んでいる。注や辞書を活用し、適宜内容を確認しながら読み進めることで、漢文の読み方を定着させたい。

「画竜点睛」は現代でもよく使われる「画竜点睛を欠く」のもととなった話であり、漢文世界への入り口として配置した。

「病人膏肓」は、生徒にとって聞き慣れない故事だと考えられるが、漢文の学習によって新しい表現を身につけ、知識を増やすきっかけとなることを期待している。

「杞憂」は、現代でも日常的に使われる言葉の由来を知るとともに、ある程度長さのある漢文の中で、上中下点や堅点の返り点・再読文字・句法といった、漢文訓読のルールについて確認することができる。

「塞翁馬」では、現在に伝わる故事成語の意義や価値について考え、「学

びを広げる」にもつなげていきたい。

「呉越同舟」は、現代もスポーツやビジネスなどに応用されており、国や時代を超えた漢文の影響力についてふれたい。
これらの学習をふまえ、「学びを広げる」では、生徒たちが語彙を豊かにし、各教材や調べた故事成語の典故となった書物を読むことを通して、漢文が日本の言語文化に与えた影響について考え、今後の学習を進めていくための動機となるよう指導したい。

単元で身につけたい言葉の力と言語活動

- 故事の内容を読み取る
- 故事成語が現在どのような意味で使われているのか理解する
- 言葉のもつ奥行きについて考える

単元の振り返り

- 故事の内容を的確に読み取ることができたか
- 故事成語がもつ言葉の奥行きについて考えることができたか
- 故事成語への関心を深め、さらなる学びへの意欲をもてたか

写真真

龍袍 紺地龍文様金糸刺繍(清代)

「写真提供」京都国立博物館／CoBase

単元の目標と評価

単元名

■ 故事成語

- 故事の内容を読み取る
- 故事成語が現在どのような意味で使われているのか理解する
- 言葉のもつ奥行きについて考える

教材名 「画竜点睛」「病人膏肓」「杞憂」「塞翁馬」「呉越同舟」
「学びを広げる 故事をたずねる」

1 単元の目標

〔知識及び技能〕(1)ア、(2)ア・ウ〔思考力、判断力、表現力等〕(1)Aア・キ・ク
「学びに向かう力、人間性等」

2 本単元における言語活動

古典の作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり報告書などにまとめたりする活動。〔思考力、判断力、表現力等〕(2)Aオ

往来物や漢文の名句・名言などを読み、社会生活に役立つ知識の文例を集め、それらの現代における意義や価値などについて随筆などにまとめる活動。〔思考力、判断力、表現力等〕(2)Aキ

3 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ● 古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。(1)ア) ● 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。(2)ア) ● 時間の経過による言葉の変化や、古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。(2)ウ) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えること。(Aア) ● 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。(Aキ) ● 古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。(Aク) 	<ul style="list-style-type: none"> ● 進んで時間の経過による言葉の変化や古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深め、文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えようとしている。

画竜点睛

1 教材採録の意図

本教科書では、漢文編の最初の単元を「一 故事成語」として、五本の教材で構成している。五本ともよく知られた話であるとともに、現在も故事成語として我々の日常の言葉に根づいているものである。故事や逸話を読むことで、言葉に関する知識が豊かになり、読解の力が身につくとともに、人生の知恵として受け継がれてきたものにふれることができる。

第一教材は、中国で最初の本格的な絵画史論書『歴代名画記』より、「画竜点睛」の故事を取りあげた。画の名人である張僧繇が、瞳を描き入れると竜が本物となって飛び去っていったという逸話である。ここから、「画竜点睛」という成語が生まれ、現代の日本では多く「画竜点睛を欠く」というかたちで、「大事な最後の仕上げが不十分だ」という意味で用いられる。本単元の話を読みながら、現在にも伝わる中国の古典の世界に関心をもたせ、漢文のおもしろさに興味を抱かせることをねらいとしている。

- ・ 主に学習内容は次のとおりである。
- ・ これまでに学習してきた訓読の方法を確認する。
- ・ 繰り返し音読することによって、漢文独特のリズムになじむ。
- ・ 文章に即して話の内容を把握し、登場人物の人物像について考える。
- ・ 故事成語の由来と意味、現在での用いられ方を理解する。

2 作品の概要

① 書名

歴代名画記（れきだいめいがき）

唐の張彦遠ちやうげんえんの著。唐およびそれ以前の画論・画史を集大成し、自己の見解を付した中国で最初の本格的な絵画史論書。十巻。

十巻のうち、はじめの三巻は、絵画の源流と効用、書と画との関係、絵画の六法、山水・樹石の描法とその変遷、名家の用筆の相違などから、価格、鑑識、印記、表装、仏寺道観の壁画などにいたる該博な知見を披瀝した画論。第四巻～十巻は、上代から唐の会昌元年（八四一年）までの画家、三百七十余人の伝記や逸事を収録し批評した作家論となっている。

② 編者

張彦遠（ちやうげんえん）

生没年未詳。唐代末期の書家・画家。字は愛賓あいひん。河東（山西省永濟県）の人。

玄宗朝に高祖父から祖父まで三代にわたって宰相を出した当時屈指の名門の出身であるが、彦遠自身は、大理寺卿に任ぜられたにすぎない。

張家は代々書画の名品を収集し、祖父の頃には、家蔵の書画は宮中の所蔵に匹敵するといわれたが、家運が衰微し、彦遠が幼少の頃にはそのほとんどを散失していた。しかし、そのような家風に影響されて、書画をよくし、名品の収集に努め、大いに鑑識眼を養った。画においては『歴代名画記』十巻、書においては『法書要録』十巻を著した。この両書によって、彦遠は唐代を代表する著名な美術批評家になった。

③ 出典

小野勝年『歴代名画記』（一九三八年、岩波書店）によった。

〔原典との異同〕

- ・ 「吳中人也。」（14・1）の後に「天監中。為武陵王國侍郎。……吳興太守。」が省略されている。
- ・ 「多命僧繇画之。」（14・2）の後に、「時諸王在外。……乃不令毀拆。又」が省略されている。

3 学習指導の展開と評価

① 評価規準

- 知識・技能** 古典に用いられている語句の意味や用法を理解し、古典を読むために必要な語句の量を増すことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。(1ア)
- 知識・技能** 古典などを読むことを通して、我が国の文化の特質や、我が国の文化と中国など外国の文化との関係について理解を深めること。(2ア)
- 知識・技能** 時間の経過による言葉の変化や、古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深めること。(2ウ)
- 思考・判断・表現** 文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えること。(Aア)
- 思考・判断・表現** 関心をもった事柄に関連する様々な古典の作品や文章などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深めること。(Aキ)
- 思考・判断・表現** 古典の作品や文章を多面的・多角的な視点から評価することを通して、我が国の言語文化について自分の考えを広げたり深めたりすること。(Aク)
- 主体的に学習に取り組む態度** 進んで時間の経過による言葉の変化や古典が現代の言葉の成り立ちにもたらした影響について理解を深め、文章の種類を踏まえて、構成や展開などを的確に捉えようとしている。

② 学習指導の展開例

「1時間を想定」

画竜点睛		学習活動	指導上の留意点
導入	<p>◆学習目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <p>1 範読し、指名読みをする。</p>	<p>●生徒に目で追わせるかたちでゆっくりと範読したあと、生徒に音読させて漢文のリズムに慣れさせる。</p>	
展開	<p>2 重要な句法、単語を確認する。</p> <p>3 張僧繇はどのような人物であったか、話し合う。</p> <p style="text-align: right;">課題①</p>	<p>●使役の句法や「即」「以為」「見」などの読み方と意味を確認させる。「即」については、他に「すなはち」と読む字との意味の違いを確かめさせる。</p> <p>●張僧繇について本文からわかることを箇条書きで書き出させ、そこから性格や人柄、考え方などを想像させる。</p> <p style="text-align: right;">語句と表現①</p>	

教材に即した評価の実際

まとめ	<p>4 「画竜点睛を欠く」は、現在どのような意味で使われているか、調べる。</p> <p style="text-align: right;">語句と表現①</p> <p>◆学習目標をもう一度確認し、学んだことを自分の言葉でまとめる。</p>	<p>●本文の内容から類推させたあと、辞書で確かめさせ、文を作って発表させる。</p>
知識・技能 (1ア)	<p>評価の実際▼「即」と同じ読みの字を探し、それぞれの意味の違いについて理解している。[記述の確認]</p>	
知識・技能 (2ア)	<p>評価の実際▼中国の故事である「画竜点睛」が、現代の日本の生活の中で使用されていることを理解している。[行動の観察]</p>	
知識・技能 (2ウ)	<p>評価の実際▼中国の故事である「画竜点睛」が日本にもたらされ、独自の意味で使用されるようになっていったことについて理解を深めている。[記述の確認]</p>	
思考・判断・表現 AA	<p>評価の実際▼本文の展開を読み取り、張僧繇の人物像を捉えている。[記述の確認]</p>	
思考・判断・表現 Aキ	<p>評価の実際▼「画竜点睛」が現代の日本で使用されている例について調べ、中国の言語文化が現代の日本の言語文化に与えている影響について自分の考えを深めている。[行動の観察]</p>	
思考・判断・表現 AK	<p>評価の実際▼「画竜点睛」が現在どのような意味で使用されているか調べ、もともなった故事と比較し、日本の言語文化について自分の考えを深めている。[行動の観察]</p>	
主体的に学習に取り組む態度	<p>評価の実際▼進んで中国の故事である「画竜点睛」が日本にもたらされて独自の意味で使用されるようになっていったことについて理解を深め、本文の展開を読み取り、張僧繇の人物像を捉えようとしている。[記述の確認]</p>	

4 教材の解説

① 大意

有名な画家である張僧繇は、武帝の命を受けて安楽寺の壁に四匹の竜を描いたが、その竜には瞳が入っていなかった。僧繇は、「瞳を描き入れると竜が飛び去るから入れないのだ」と言っていたが、人々はそれを信じなかった。強く頼んで瞳を描き入れさせたと、僧繇の言葉どおりに、竜が壁から躍り出て、天に昇ってしまった。

② 書き下し文と口語訳

① 張僧繇、吳中人也。	① 張僧繇は、吳中の人なり。	① 張僧繇は、吳中の人である。
② 武帝崇飾仏寺、多命僧繇画之。	② 武帝仏寺を崇飾して、多く僧繇に命じて之に画かしむ。	② (梁の)武帝は仏教寺院を立派に裝飾し、多くの場合は僧繇に命じてこれ(＝寺院の壁)に(絵を)描かせていた。
③ 金陵安楽寺、四白竜、不点眼睛。	③ 金陵の安楽寺の四白竜は眼睛を点ぜず。	③ (僧繇は)金陵の安楽寺の(壁に描いた)四匹の白竜(の絵)には瞳を描き入れなかった。
④ 毎曰、「点睛、即飛去。」	④ 毎に曰はく、「睛を点ぜば、即ち飛び去らん。」と。	④ (そして僧繇が)いつも言うには、「(竜に)瞳を描き入れたならば、すぐに飛び去ってしまうだろう。」と。
⑤ 人以為妄誕、固請点之。	⑤ 人にて妄誕と為し、固く之を点せんことを請ふ。	⑤ 人々は(それを)でたらめだと思い、強くこれ(＝瞳)を描き入れることを求めた。
⑥ 須臾、雷電破壁、兩竜乗雲、騰去上天。	⑥ 須臾にして雷電壁を破り、兩竜雲に乗り、騰去して天に上る。	⑥ (僧繇が瞳を描き入れると)たちまち雷が(起こって)壁を突き破り、二匹の竜は雲に乗って、勢いよく飛び去り天に昇っていった。
⑦ 二竜未だ点眼者見在。	⑦ 二竜の未だ眼を点ぜざる者は見に在り。	⑦ (残りの)二匹の竜でまだ瞳を入れないものは現在も(安楽寺の壁に)残っている。

(歴代名画記)

雲、騰去上天。

⑦ 二竜未だ点眼者見在。

二竜未だ点眼者見在。

乗り、騰去して天に上る。

⑦ 二竜の未だ眼を点ぜざる者は見に在り。

り。

こつて)壁を突き破り、二匹の竜は雲に乗って、勢いよく飛び去り天に昇っていった。

⑦ (残りの)二匹の竜でまだ瞳を入れないものは現在も(安楽寺の壁に)残っている。

③ 展開図

● 張僧繇（呉中の人）

【状況】

梁の武帝……仏教寺院を立派に装飾
↓ 僧繇に絵を描かせることが多かった。

【理由】

「竜に瞳を描き入れたならば、すぐに飛び去ってしまう。」から。
しかし瞳を描き入れなかった。

【結果】

（1）僧繇は、金陵の安楽寺の壁に四匹の白竜の絵を描く。

（2）人々はでたらめだと思い、瞳を描き入れることを求めた。

僧繇は、二匹の竜に瞳を描き入れる。
瞳を描き入れた二匹の竜は、天に昇っていった。
瞳を入れなかった二匹の竜は、現在も安楽寺の壁に残っている。

④ 語句・文脈の解説／脚問・発問

14 ページ

題名 画竜点睛

絵画や文章などの要所に一筆加えることで、全体が引き立つこと。また、最後に肝心な一点を加えて、完成させること。物事の最後に行く大事な仕上げ。ふつう「画竜点睛を欠く」の形で用いられる。物事が総体的に完成していても、最後の大切な一点が不十分であることをいう。「画竜（ぐわりよう）」は「画竜（ぐわりゆう）」ともいう。

1 張僧繇 「生没年未詳。南北朝時代の梁の画家。」將軍であり、政治家でもあり、僧でもあった。武帝の命を受けて、仏寺に多くの壁画を描き、仏画・人物画に優れていた。人物画では、晋の顧愷之、劉宋の陸探微と並んで三大家と称された。『歴代名画記』では、当時の画家の中で、「上品の中」という大変高い評価がなされている。

1 武帝 「在位五〇二年～五四九年。梁の初代皇帝。姓は蕭、名は衍。」治世の前半には、文治主義的施策によって学術文化の振興を図り、六朝貴族文化の黄金時代を築いた。しかし中頃から、その政治は次第に放縱になり、仏教に溺れて莫大な財を投じ、国家財政を破綻させた。そして末年には、反乱にあい、幽閉されたまま憤死した。

1 崇飾 「立派に装飾する。」「崇」は、もともと「たつとぶ」ことであるが、ここでは、「立派に」「盛んに」の意味。

1 命僧繇画之 僧繇に命じてこれ（寺院の壁）に（絵を）描かせていた。「命」は使役を表す。「之」は、ここでは寺院の壁を指す。

◆命 [A] [B] [C] [D] [E] [F] [G] [H] [I] [J] [K] [L] [M] [N] [O] [P] [Q] [R] [S] [T] [U] [V] [W] [X] [Y] [Z] [AA] [AB] [AC] [AD] [AE] [AF] [AG] [AH] [AI] [AJ] [AK] [AL] [AM] [AN] [AO] [AP] [AQ] [AR] [AS] [AT] [AU] [AV] [AW] [AX] [AY] [AZ] [BA] [BB] [BC] [BD] [BE] [BF] [BG] [BH] [BI] [BJ] [BK] [BL] [BM] [BN] [BO] [BP] [BQ] [BR] [BS] [BT] [BU] [BV] [BW] [BX] [BY] [BZ] [CA] [CB] [CC] [CD] [CE] [CF] [CG] [CH] [CI] [CJ] [CK] [CL] [CM] [CN] [CO] [CP] [CQ] [CR] [CS] [CT] [CU] [CV] [CW] [CX] [CY] [CZ] [DA] [DB] [DC] [DD] [DE] [DF] [DG] [DH] [DI] [DJ] [DK] [DL] [DM] [DN] [DO] [DP] [DQ] [DR] [DS] [DT] [DU] [DV] [DW] [DX] [DY] [DZ] [EA] [EB] [EC] [ED] [EE] [EF] [EG] [EH] [EI] [EJ] [EK] [EL] [EM] [EN] [EO] [EP] [EQ] [ER] [ES] [ET] [EU] [EV] [EW] [EX] [EY] [EZ] [FA] [FB] [FC] [FD] [FE] [FF] [FG] [FH] [FI] [FJ] [FK] [FL] [FM] [FN] [FO] [FP] [FQ] [FR] [FS] [FT] [FU] [FV] [FW] [FX] [FY] [FZ] [GA] [GB] [GC] [GD] [GE] [GF] [GG] [GH] [GI] [GJ] [GK] [GL] [GM] [GN] [GO] [GP] [GQ] [GR] [GS] [GT] [GU] [GV] [GW] [GX] [GY] [GZ] [HA] [HB] [HC] [HD] [HE] [HF] [HG] [HH] [HI] [HJ] [HK] [HL] [HM] [HN] [HO] [HP] [HQ] [HR] [HS] [HT] [HU] [HV] [HW] [HX] [HY] [HZ] [IA] [IB] [IC] [ID] [IE] [IF] [IG] [IH] [II] [IJ] [IK] [IL] [IM] [IN] [IO] [IP] [IQ] [IR] [IS] [IT] [IU] [IV] [IW] [IX] [IY] [IZ] [JA] [JB] [JC] [JD] [JE] [JF] [JG] [JH] [JI] [JJ] [JK] [JL] [JM] [JN] [JO] [JP] [JQ] [JR] [JS] [JT] [JU] [JV] [JW] [JX] [JY] [JZ] [KA] [KB] [KC] [KD] [KE] [KF] [KG] [KH] [KI] [KJ] [KK] [KL] [KM] [KN] [KO] [KP] [KQ] [KR] [KS] [KT] [KU] [KV] [KW] [KX] [KY] [KZ] [LA] [LB] [LC] [LD] [LE] [LF] [LG] [LH] [LI] [LJ] [LK] [LL] [LM] [LN] [LO] [LP] [LQ] [LR] [LS] [LT] [LU] [LV] [LW] [LX] [LY] [LZ] [MA] [MB] [MC] [MD] [ME] [MF] [MG] [MH] [MI] [MJ] [MK] [ML] [MN] [MO] [MP] [MQ] [MR] [MS] [MT] [MU] [MV] [MW] [MX] [MY] [MZ] [NA] [NB] [NC] [ND] [NE] [NF] [NG] [NH] [NI] [NJ] [NK] [NL] [NM] [NO] [NP] [NQ] [NR] [NS] [NT] [NU] [NV] [NW] [NX] [NY] [NZ] [OA] [OB] [OC] [OD] [OE] [OF] [OG] [OH] [OI] [OJ] [OK] [OL] [OM] [ON] [OO] [OP] [OQ] [OR] [OS] [OT] [OU] [OV] [OW] [OX] [OY] [OZ] [PA] [PB] [PC] [PD] [PE] [PF] [PG] [PH] [PI] [PJ] [PK] [PL] [PM] [PN] [PO] [PP] [PQ] [PR] [PS] [PT] [PU] [PV] [PW] [PX] [PY] [PZ] [QA] [QB] [QC] [QD] [QE] [QF] [QG] [QH] [QI] [QJ] [QK] [QL] [QM] [QN] [QO] [QP] [QQ] [QR] [QS] [QT] [QU] [QV] [QW] [QX] [QY] [QZ] [RA] [RB] [RC] [RD] [RE] [RF] [RG] [RH] [RI] [RJ] [RK] [RL] [RM] [RN] [RO] [RP] [RQ] [RR] [RS] [RT] [RU] [RV] [RW] [RX] [RY] [RZ] [SA] [SB] [SC] [SD] [SE] [SF] [SG] [SH] [SI] [SJ] [SK] [SL] [SM] [SN] [SO] [SP] [SQ] [SR] [SS] [ST] [SU] [SV] [SW] [SX] [SY] [SZ] [TA] [TB] [TC] [TD] [TE] [TF] [TG] [TH] [TI] [TJ] [TK] [TL] [TM] [TN] [TO] [TP] [TQ] [TR] [TS] [TT] [TU] [TV] [TW] [TX] [TY] [TZ] [UA] [UB] [UC] [UD] [UE] [UF] [UG] [UH] [UI] [UJ] [UK] [UL] [UM] [UN] [UO] [UP] [UQ] [UR] [US] [UT] [UU] [UV] [UW] [UX] [UY] [UZ] [VA] [VB] [VC] [VD] [VE] [VF] [VG] [VH] [VI] [VJ] [VK] [VL] [VM] [VN] [VO] [VP] [VQ] [VR] [VS] [VT] [VU] [VV] [VW] [VX] [VY] [VZ] [WA] [WB] [WC] [WD] [WE] [WF] [WG] [WH] [WI] [WJ] [WK] [WL] [WM] [WN] [WO] [WP] [WQ] [WR] [WS] [WT] [WU] [WV] [WW] [WX] [WY] [WZ] [XA] [XB] [XC] [XD] [XE] [XF] [XG] [XH] [XI] [XJ] [XK] [XL] [XM] [XN] [XO] [XP] [XQ] [XR] [XS] [XT] [XU] [XV] [XW] [XX] [XY] [XZ] [YA] [YB] [YC] [YD] [YE] [YF] [YG] [YH] [YI] [YJ] [YK] [YL] [YM] [YN] [YO] [YP] [YQ] [YR] [YS] [YT] [YU] [YV] [YW] [YX] [YY] [YZ] [ZA] [ZB] [ZC] [ZD] [ZE] [ZF] [ZG] [ZH] [ZI] [ZJ] [ZK] [ZL] [ZM] [ZN] [ZO] [ZP] [ZQ] [ZR] [ZS] [ZT] [ZU] [ZV] [ZW] [ZX] [ZY] [ZZ]

2 安楽寺 東晋時代に創建された寺院。梁の時代には崇麗な伽藍になったという。

2 白竜 四匹の白い竜。「白竜」は天帝の使者とされた崇高なもの。

4 未点眼者 まだ瞳を描き入っていない竜。「眼」は、瞳。「未点眼者」と「二竜」とは、同格関係である。

5 見在 現在も（安楽寺の壁に）残っている。「見」は、「現」と同じ。

*見 【げん】 現存の・今の

*以為 【もつてトトナス】 とする・と見なす

3 人以為妄誕 人々はでたらめだと思い。「妄」も「誕」も、ともに「うそ」「でたらめ」の意。「誕」には「生まれる」の意味もある。

*即 【すなはち】 ただちに・すぐに「連続」／つまり「判断」／実際に「強調」

2 点 入れる。描く。点を打つように描き入れること。「点眼」の「点」。
2 眼睛 「瞳。」「目の玉。」「睛（目偏）は、「睛（目偏）」とは別字。
2 毎 ①ごとニ、②つねニ、などの用法がある。ここでは②の用法。
3 即 ただちに。すぐに。「即（すなはち）」には他に、つまり（判断）、実に（強調）の意味がある。

【固請点之】のあとに、どのようなことが行われたか。

答 僧繇が、自分の描いた四匹の竜のうちの二匹に、瞳を描き入れた。▼まずは、「固請点之」の部分をしつかりと解釈する。「固く」は、再三、強くの意。「之」は、「睛」を指す。ゆえに、この部分は、「強くこれ（二瞳）を描き入れることを求めた。」と解釈できる。つまり、人々は僧繇に「竜の瞳を入れること」をしつこく要求し、「二匹の竜は天に昇っていった」ということになる。では、「どのようなことが行われた」結果「二匹の竜は天に昇っていった」のであろうか。その部分が本文には書いてないので、想像して考える。つまり、僧繇は人々の懇願を聞き入れ、自分の描いた四匹の竜のうちの二匹に、瞳を描き入れたのである。

3 雷電 かみなりといわずに。「雷」は、雷の音。「電」は、その光、稲光。
4 壁 竜が描かれている壁。
4 両竜 四匹のうち、瞳を描き入れた二匹の竜。
4 騰去 勢よく飛び去っていく。「騰」は、激しい勢いで躍り上がることに飛び上がる。飛び立つ。

⑤ 「課題」の解説

張僧繇はどのような画家であったか、話し合ってみよう。

解答例

- ① 生き生きとした作品を生み出すことのできる、神秘的な力をもつ天才的な画家であった。
- ② 常に本物を意識した絵を描く画家であった。
- ③ 人々から瞳を入れることを頼まれても、全部の竜に瞳を入れることをしない用心深い画家であった。

解説

- ①② 彼の作品の神秘性に着目する。瞳を入れることで「本物」の竜になるということは、もちろん、彼の作品そのものがすばしかったからである。天才的な作家に宿る神秘的な力を伝えるこの種のエピソードは、古今東西を問わずよくある話である。それらの中で最後に一つ加えるものといえば、その多くはやはり「瞳」である。ここでは、張僧繇が「本物」を意識した作品を描く、天才画家であったことをおさえてほしい。神秘的な力をもつ、天才肌、といった意見が出ればよいであろう。
 - ③ 短い文章ではあるが、行動面から張僧繇をみていくと、性格を読み取れる箇所がある。それは、四匹の竜を描きながら、そのうちの二匹にだけ瞳を入れたという所である。その結果、二匹の竜は壁に残り、後世にも伝えることができた。
- 張僧繇について、それぞれが思いをはせ、発表したり話し合ったりすることで、漢文に親しみをもつきっかけにもなるであろう。多くの意見を受け入れ、その根拠さえしっかりしていれば、自由に発言させたい。

⑥ 「語句と表現」の解説

「即」(14・3)以外で「すなはち」と読む字を調べ、意味の違いをまとめてみよう。

解答例

- ① 載・斯……………ゆるく上を受けて、そこで。そのまま。
- ② 則……………すればすなわち。仮定や条件を受け入れて結果を述べる。(主格をうけて)それは。前後が「述語」にはさまれる場合、前の句が原因・前提を、後の句がその結果を表す。「レバ則ち」と訓読することが多く、「レバ則」と呼ばれる。
- ③ 即・便……………とりもなおさず。そのまま。すぐに。また「則」と同様に用いられる。「便」は「即」よりやや軽い。「即」は、即刻・即座の「即」。
- ④ 乃・迺・寧……………そこで。しかるに。かえって。なんとまあ。「乃」は、「即」と比べて、より意味が重い。「乃」は心理的屈折、抵抗感などを経ての接続を表す場合に用いられる。
- ⑤ 曾……………「則・乃」と同じ。
- ⑥ 輒……………そのたびごとに。たやすく。すぐに。

解説

①～⑥まで「すなはち」と読む字を示した。中でも、②「則」・③「即・便」・④「乃」は、漢文を読む際に頻出する字であり、内容理解の助けにもなるので是非覚えておきたい。また、「解答例」には、それぞれの「すなはち」の細かい使い分けを示した。しかし、これは厳密なものではなく、文脈によって異なる使い方をすることもある。まずは、基本的な意味をしっかり押さえた上で、臨機応変な理解をする必要がある。

② 「画竜点睛を欠く」は、現在どのような意味で使われているか、調べてみよう。

解答例

だいたいよくできているが、最後の仕上げが不十分であるため、全体が不完全になってしまっている。

解説

「画竜点睛」は、「物事全体を生かす中心」「物事を完璧なものにするための最後の仕上げ」などの意味である。ゆえに、よく使われる「画竜点睛を欠く」という言葉は、「物事を完璧なものにするための最後の仕上げが不十分だ」という意味になる。ことわざの「仏作って魂入れず」「仏作って眼を入れず」とほぼ同じ意味である。

⑦ 読み深めるために

「画竜点睛」は、天才的な画家の作品に宿る神秘的な力を伝える逸話である。張僧繇は当時の優れた画家であり、「画竜点睛」のもとになった話としては、『歴代名画記』が最も有名である。また、「画竜点睛」が人口に膾炙している言葉であることも相まって、張僧繇のこのエピソードは、『歴代名画記』の他にも、『水衡記』『太平広記』(卷二百十二)『宣和画譜』『琅邪代醉篇』(卷十八)その他、多くの書物にも記載されている。

「画竜点睛」は、「物事全体を生かす中心」「物事を完璧なものにするための最後の仕上げ」などの意味であるが、この意味を考えると同時に思い浮かぶのは、「蛇足」という故事成語であろう。「蛇足」は、余計なもの(蛇の足)を書き足したためにお酒が飲めなかつた男の逸話であり、その故事成語としての意味は、「無駄なもの」「余計なもの」である。「蛇足」が「加

5 参考文献

「えること」を否定的に捉えているのに比べ、「画竜点睛」は、「加えること」を肯定的に捉えている。このように、最後の一筆が正反對の作用をするというのが、とてもおもしろい。

① 指導者のための参考文献

- 小野勝年『歴代名画記』(一九三八年、岩波文庫)
- ……『歴代名画記』のテキスト・注釈書である。
- 長廣敏雄『歴代名画記1・2』(一九七七年、平凡社)
- ……『歴代名画記』のテキスト・注釈書である。

② 学習者のためのブックガイド

- 宇佐美文理『歴代名画記——〈気〉の芸術論』(二〇一〇年、岩波書店)